

え高き神聖大人等御上小め多の依例と思頼
みて其志多撓動以事なく惟予内を天御神地御
神の冥鑑おそむ外を知己故千載下小求め
て鈴屋大人の世中き何よおけても神をおもす
神の恵ををも忘れ忘るあよと詠まれ古歌よ後の
世も此世も神小はるにるやおろりれる身れ頼
みあるらむまよと坐れまぬけきも此世よをる中
あどあ依如くおれ天地間予有とある萬物も事
業も皇祖天神はと八百万神の御功德小一をし

て漏遺るクキオツふをあた道理コトワはとく思惟ひ殊小上よ

あげ奉るお系皇祖天神等申す更にてそれ

罔魂神のく申はふもまよ三種坐してか飯依

神の生坐し大初の時の罔魂小坐し此多合記

りて生罔魂神と申しけて後小罔々小功德坐る

神等故も某罔魂神と申し罔小依て罔魂神や

おて一宮神小坐すもありまよ大和社小坐は神

も大罔魂神とて出雲大神一宮神此は先師の玉

の荒御魂神小坐すあり一宮神だまらよ委く

説れる依の如しまよ二宮三宮四宮かといふ稱
もあるを已よある人の説あ依故見承るく玄道
の抄しおけ氏神産土神氏神と産土神と此差の
る物もあり氏神産土神事と師説の如くあるを
伊勢物語小二條の後まよ春宮の御やま所と申
けるに氏神はほうで給ひけると云るハ古今集

小大原野にまうて賜ふとある此社の縁を大
鏡も委く見え藤原氏の正した氏神あるこ
や論おく長谷寺、験記小後一條院の御寓春日社
司正預中臣信清といふ者の嫡男信近が足小蛇
眼、疔やいふ七日瘡いきて死かむとせしめ
父信清悲これ餘り小春日社小参りていよ
人一人をむ千金にも替給えとあそ承るに御
氏子をむ一人失ひ給ふぞと歎きけれむ巫よ神
明託せ給ひて我氏子を思ふこと汝の父として
子を思ふ小超ありと宜するよし見え史官記小
少納言藤原通憲ぬしれおとを改高階復本姓藤
原依氏神崇勸修寺記小延喜御在位之日寂益抽
補宮内大輔其妻列子叙三位宮道明神彼寂益氏
神寵神云よと氏人慶賀之時参入寺家故御殿必
令參給正衣冠供御明於西院又奉幣宮道明神と
あるおどき正した氏の神と聞ゆは長谷寺の
験記小長谷寺小坐も天満宮の御事天曆二年の
七月の頃寶殿を造て勸請奉れる事其年九月

廿日御内小始て我氏神と號して云々祭の儀式
成はといひ臥雲日件録よ赴地寶寺出門一町
有住吉明神祠廟誦咒以獻凡世人以下神明主于我
所主之地者謂之氏神予生于泉州界南故住吉乃
氏神也とも有れむ氏神とえ世に打混清て産
土神を申もや古事小てハ有るありの
大御功德をいま更稱奉らむのれくいを廣博
深遠く坐てそれ甚じた御寵靈の中小我人をも
小知らば識らば生息牙あるお縁由をうまらふ
悟得て行住坐臥小め造次顛沛の間小もおれを
忘奉るおとねく苟め世小生活らむ極み其大御
量を心小體認て常に心性を祓ひ清めて齋はす

お、志み心志はもたら善事善行小たもむけ。各
それ職業^{ナリハヒ}はいやおやめよつと免いや勵^ガみふは
げこて神習ひ習ふるく。はて世は退^カて後^{ノチ}も理
それ如く。幽冥^{カウリヨ}知^{シラ}に大神の神御門^ニ參^マ詣^ゲて。その
大命^ヲを頂^キふ戴^キ奉^リ蒙^テ持^チて。天地のむと。皇祖^{アツミオヤ}天神^{カミ}
の聞^キ看^{シメ}に神御政^ヲをこめ。相輔^{アヒタス}けあふ。ひ仕奉^シ
お。生涯^{ヨノキハミカク}蒙^テ賜^{タレ}ふ。御うおく。びれ。ちの
一も報奉^リてむと。平恒^{ツネ}ふやたけ心を振起^{ヲトク}し。精^シ
神^シを築凝^{ツキコシ}して誓^{ウケ}ひ請^{コヒ}れみ奉^ルる。事^{コト}おこのし。

あふのこは。

はのこても。も。こかこふ。き免^カのみれ。
やそのくまごれ。ぐこまののみぞと。

明治五年夏五月志はこをすぬ

おあのみまひの。じやこつてらかくあること
ちあてまあまご。ひないおぼきふみはすとも
しく。いとこのこたがちあふ。まのく京^{キョウ}のほ
こてあそと。まておきおふ。小^コ校者^{コウシャ}らのみいで

て。い。の。で。い。げ。せ。と。せ。ち。に。い。ま。ま。ひ。む。る。ふ。ぞ。
い。ふ。み。の。て。ふ。そ。れ。よ。お。け。て。の。く。清。が。き。せ。は。
せ。お。る。も。ね。の。ら。ま。げ。く。よ。に。お。る。山。れ。の。の。こ。
こ。ち。の。み。せ。ら。る。く。を。そ。を。道。れ。志。系。る。の。附。録。
を。は。じ。免。て。そ。れ。他。の。も。ね。ぎ。め。よ。お。ぎ。く。志。
係。し。そ。る。て。む。と。ぞ。

夜曾廻久萬泥四之卷終

夜蘇乃久萬泥のねく書

惶。は。や。我。皇。國。の。大。御。政。事。を。も。八。百。や。せ。れ。昔。ふ。か。牙。
さ。ば。と。外。國。の。も。ぶ。り。を。さ。牙。ひ。や。真。盛。に。布。行。を。せ。
給。牙。は。も。皆。冥。府。に。大。神。の。大。御。心。ふ。し。あ。る。づ。き。ま。さ。だ。
鬼。ふ。め。角。ふ。も。下。あ。る。者。を。御。お。も。む。け。の。儘。よ。遵。ひ。奉。
は。む。じ。ぞ。古。牙。より。大。御。國。の。御。掟。牙。い。あ。り。と。係。然。と。あ。
終。ど。島。嶼。産。み。神。を。産。み。そ。め。給。牙。る。大。神。ま。ら。御。心。に。
儘。ふ。と。物。よ。は。げ。で。猶。御。祖。の。大。神。よ。卜。問。ひ。學。む。給。牙。

家系。況て降ちゆく世と成らざる。尊位も卑なる力を
盡し勉を學びてさる。道の本末善悪の差別を辨ふ
法を。文明開化や。真道の蘊奥を。進歩しめ給ふ
と。れ。最も恐は敷旨ふいある。る。れ。爰は神習ふ我學
びの祖。矢野大人幼稚より。古く學ぶ心。任絲より
て。齡は廿をせば。頃より。道の爲よと。都小移
り住て。鈴乃屋。氣吹。廼舍。二大人の。御手振。恐み學び
は。して。直く正しく。勵み勉めて。造次。顛沛も怠らなく。

漢倭廣く深く考す。あ。として。種々。れ。書。著述。は。せ
は。功勞。れ。隱。き。れ。て。恐。く。め。大。朝。廷。邊。近。く。大。學。博。士
を。あ。む。免。さ。げ。は。せ。賜。ひ。ら。善。事。に。禍。事。い。つ。く。習。と
と。小。や。先。つ。年。俄。小。本。つ。固。ふ。下。と。よ。い。事。と。成。ぬ。る。故。
皆。人。を。く。海。を。ほ。い。か。た。事。を。思。ふ。め。し。の。師。の。さ。あ。ら
は。今。と。年。八。十。路。小。近。な。母。乃。自。の。よ。せ。ば。と。と。め。御
許。小。仕。ま。む。中。に。予。の。幸。ふ。と。は。た。や。思。ふ
だ。か。ふ。く。に。公。の。御。恩。澤。の。惶。と。か。け。り。斯。て。其。由

此所彼處の教子子等傳へ聞て群集ひて。此書とみ解
てよれど。己の志をいひまかせど。思ふ旨あれど。こ
びきゆゑしてよ。又よた折めあはせと。ふたは受がひ
はさねば。皆力なくやみにまはさば。うたはよく御許小
通ひ侍らふ者やと。七八人すの過ざりけり。こ真船
ぬ其數ふのあはれど。大人の御許小仕すし。いさや稚の
まし程よて。元よりさぢなはらうす。公私暇なく急
勝も過ちけは。いさ口惜きまじ。只顯よの君まじ。幽ふ

を神れ坐すして。神小君よ背ま奉るは。いさ疑ふまじ
は。いさよし。いさも懇小諭。教子給へり。いさは。いさ
此大人の恩頼よ。いさも有き。扱去年よ。いさめくりなく。
御許ちのく往復ふ事と成て。一日まじ。咲の。いさ梅見
が。いさ問ひま。いさわらせ。いさに。折節産土の神小詣で。給
ふ。いさ文机の傍に。いさ見れば。夜曾乃隈泣ち。いさ書け。草稿あ
る。いさ竊よ。いさ披き。いさ見るに。いさ最も。いさ惶く。いさ奇妙。いさある。いさ事のみ。いさある。いさ
中小。いさ生と。いさ生け。いさほ。いさも。いされ。いさ生。いさま。いさおも。いさひ。いさ死を。いさ厭ふ。いさも。いさ是。いさ皆

深き幽契ある事と一聞ゆれど。又求め難く免まがと
伎も此道小て。古より種々記し傳へし書は澤ふれ
ど。多くは世々れ癡人の偽り杜撰する事小て。反りて
惑いしぐはのみなる故。世れひとの寔と一め信ひ頼
み。終る身罷りし靈のゆくすも忘ら傳。呻吟ひ苦しむ
おとれ。昔今多く物小め見え。はと今れ現ふ有る人れ
眼ふはる見え糸野小め山よも幽界のあやと。其ま王
宰どり賜ふ神々小も階級はし。總て人れ生涯の

諸行の善悪は。精微小照覽し賜ひ。身罷まが頓て彼の
界の御法令のまに。仕す勤むほき業れ。无窮よ有
や。一め知らぬの故ふ。顯し世よ精神を築凝し。程々れ
功績を立むとめせ。冥府やい只遙けき余所ごやに
思ひ過し。今も身れ上小係れる事と一め思ひて。
徒ら小朽果るも。寂々哀と墓れなわらあるは。師の彼
の二大人れ御説を本と。かく昔今千萬の書れ中
より。靈の行すれ確證とめ成法な事案を抄録して。悉

小考説をめ加予賜へはき。實尔名に負ふ夜籬乃隈泥
の神おとにして。一度讀み渡して予。入るはもの
道一筋小。皇神等れ稜威の著明く。眼れあしめさるるの
むあちせらほは。疑れくはるは。皇神等の御謀
にして。さば小氣吹乃屋大人の。靈能真柱の礎と強く
堅く築凝し。まじたま。今しめ此書あてて。摺卷と形し
て。世ふめ高く桁梁ともれし。あは。戸牖の錯ひ動きれ
は皇國へ更ふ。四方八方びとに至るまで。今より後。

と。魂れゆく予の惑ふ。千代の栖ることしめ。仰ま
讀むるき書よ。ことと。獨りおぼや。な繰返さ。うら。や
歸は。ぬれだ。真船と。師の心。傳まし。隙ふ。此書
ぬき。よひ。見お。き。れ。や。やく。め。見。せ。給。り。ぞ。と。恨
み。ま。させ。ば。師。の。う。ち。ほ。と。て。お。答。め。る。お。き。人。子
見。え。づく。も。あ。ら。う。い。と。か。と。た。の。ち。お。る。奴。鬼。の。く。京
小。登。り。て。こ。る。を。捨。置。つ。る。の。此。ほ。ど。聊。書。加。ふ。る。事。れ
あ。て。取。出。お。る。な。り。と。の。た。ま。ふ。な。ら。う。は。同。志。學

びの兄弟どちを謀らひて。こので「をやくせふめ廣
免ばやと。穴がちふをひまをせだ。けらば持めきて其
ひき文どめを校正して。をばふ議りてよを。ゆるし賜
ふらとれ嬉しくて。萬をおよて清書せし。月あち交東
の官許れあましはふく。かく櫻木に物をする事とい
ふとぬ。此をを記し添ふる者ハ。明治七年三月廿日。
師と同一伊豫の国。喜多郡ふまめ系岡崎真船。

官許

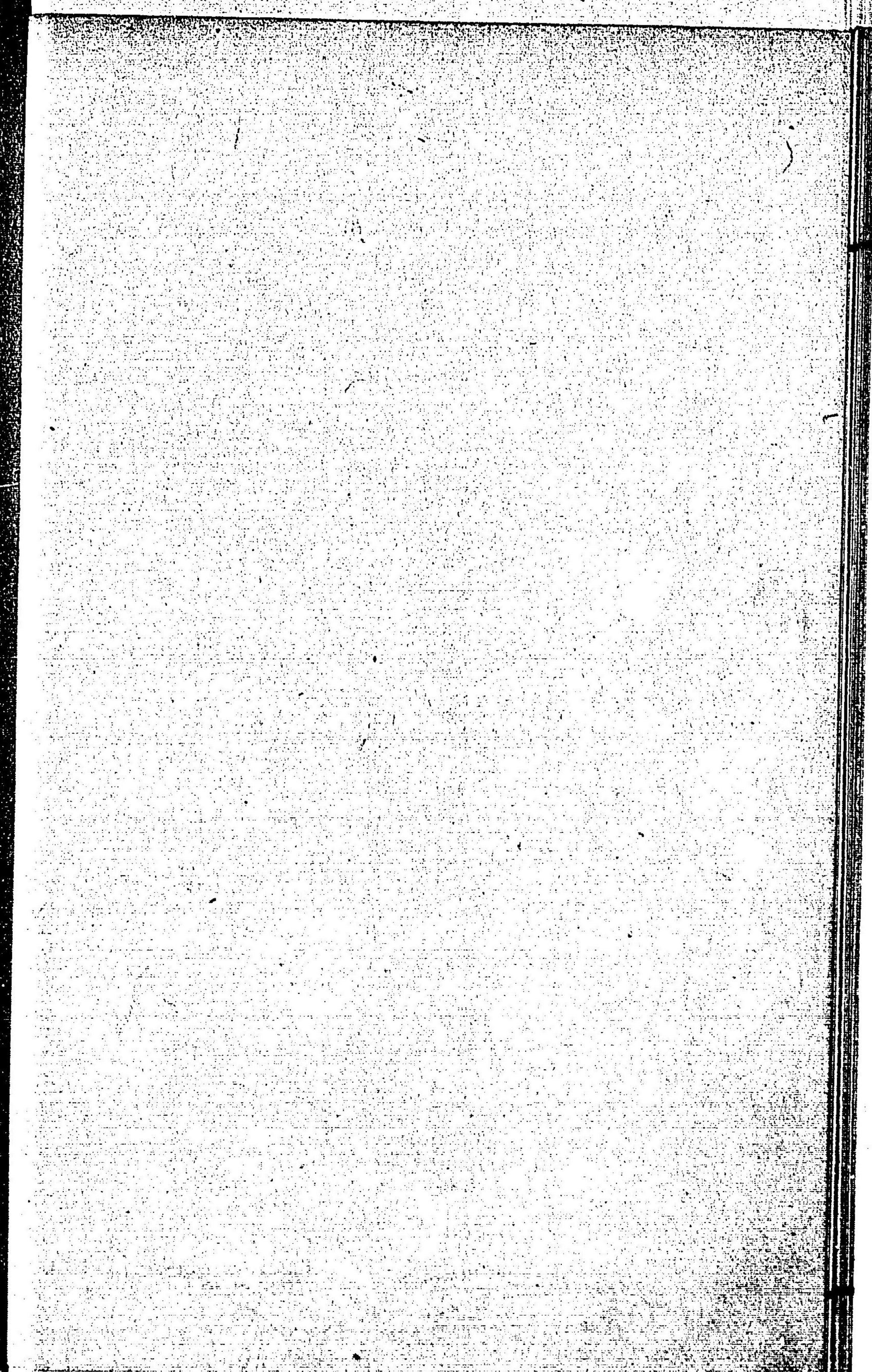
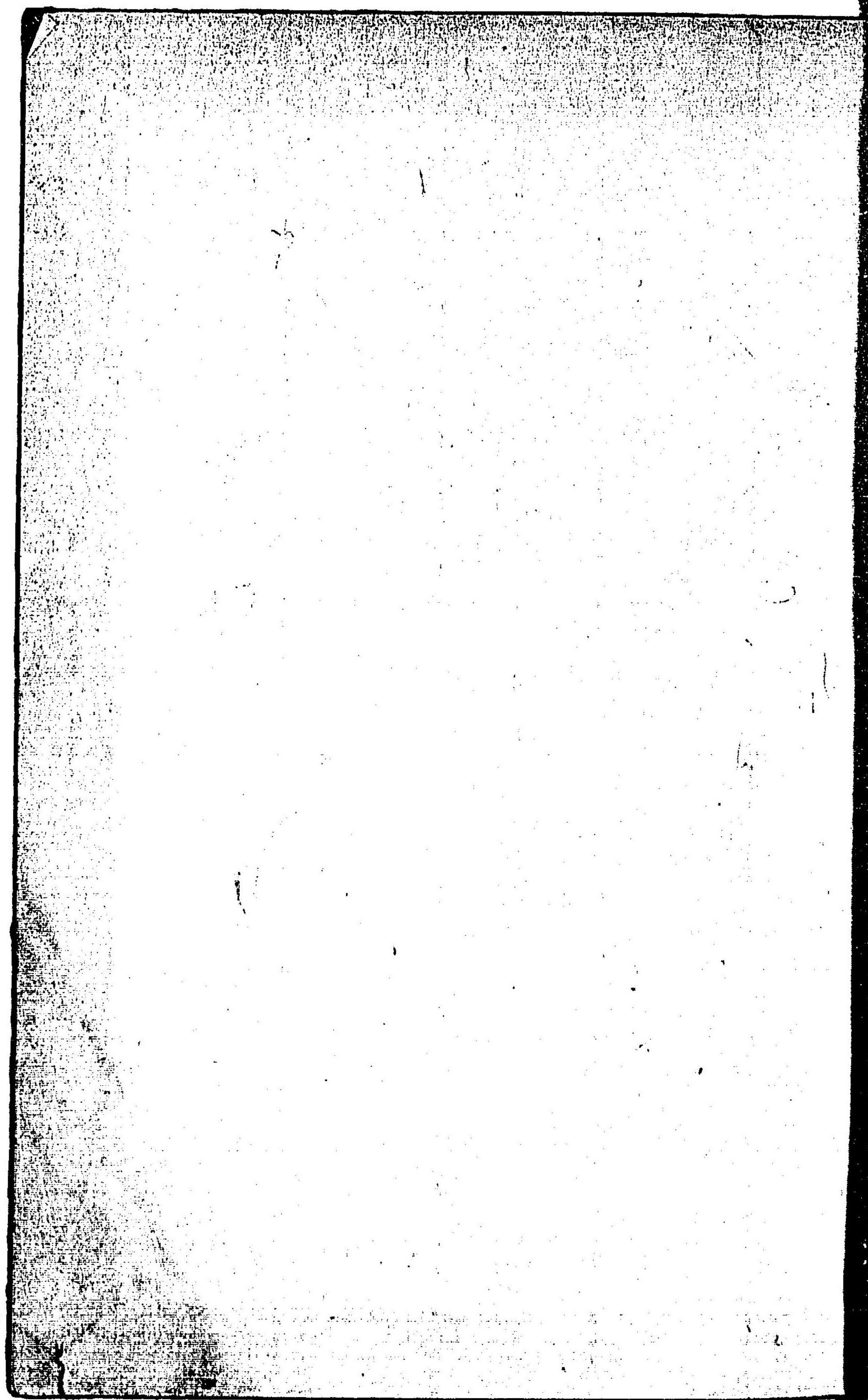
明治七年三月

角田家藏版

製本所

京都

菅廼舎池邨氏



111
合 2
84

